

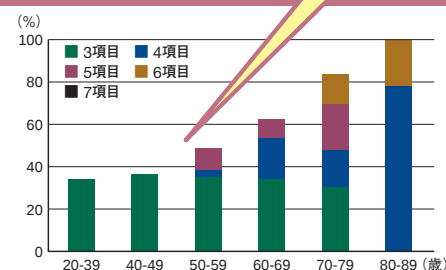
— 口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します —

「口腔機能低下症」は、う蝕や歯の喪失など従来の器質的な障害とは異なり、いくつかの口腔機能の低下による複合要因によって現れる病態。7つの下位症状のうち3項目以上該当する場合に「口腔機能低下症」と診断されます。詳細は日本歯科医学会発信の「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」をご参照ください。

▶ 中年期から口腔機能検査を実施 患者さんの将来の健康のために

当院では、40代で約4割、50代で約5割の口腔機能低下症該当率との論文(図1)をもとに、検査機器導入当初より40歳以上の患者さんに対して検査を実施しています。ツール(図2)を用いて口腔機能の問診を行い、院内のシステムの一部として取り入れています。咀嚼障害、摂食嚥下障害など口腔の機能障害になる前の早期の介入が重要と感じており、患者さんの将来の健康につながると考えています。

図1 年代別の
口腔機能低下症の割合



Point! 40代で約4割、50代で約5割の割合。

Point! 問診にはツールを活用! 次回来院時に検査を実施。



図2 口腔機能低下症検査説明ツール

久保先生監修
「検査の進め方動画」はこちら

論文: 太田 緑ら「地域歯科診療所における口腔機能低下症の割合」
日本老年歯科医学33(2),79-84,2018-09-30



久保歯科医院
(東京都江東区)

久保 慶太郎 先生

久保歯科医院では、予防治療を中心とした診療を行っています。その中で口腔機能管理を通じて、患者さんの健康寿命延伸を目指しています。令和4年度歯科診療報酬改定に伴い、口腔機能管理加算の対象年齢が、50歳に引き下げられましたが、当院では以前より40歳以上の患者に対し積極的に口腔機能精密検査を行ってきました。検査の対象者は高齢者と思われがちですが、40~50歳の方でも約40%の方が口腔機能低下症に該当するという研究結果もあることから、今回の改定に伴い、検査の対象を増やして、より多くの方に口腔機能管理を行っていただきたいと思っています。



若手歯科医師こそ口腔機能管理を!!

私は口腔機能低下症について卒前教育で学んでいたため、オーラルフレイルなどの言葉にも馴染みがあり、口腔機能精密検査を日常臨床に取り入れることは容易でした。検査方法も一度覚えてしまえば簡単ですので、私のように卒業後まもない先生方にも積極的に取り入れていただきたいです。口腔機能低下症は、本症例のように高齢者だけでなく、40代50代のうちから口腔機能低下症の疑いも含め、早期に発見し介入することが、口腔機能の維持や健康寿命の延伸につながると考えます。

歯科医師 戒田 麻夏 先生

症例



患者: 57歳 女性 口腔乾燥が疑われた症例

他の治療途中で口腔乾燥を疑い、追加で問診を実施したところ、口腔乾燥についての訴えがあり、口腔機能精密検査を実施。

〈検査当日〉口腔機能精密検査の結果、口腔乾燥、舌口唇運動機能(/ka/)の2項目が該当し、口腔機能低下症の疑いと診断。疑いではあるが、口腔機能管理として、口腔乾燥に対しては唾液腺マッサージの指導(1日数回)、口腔湿潤剤の使用を勧めた。舌口唇運動機能に関しては早口言葉の訓練を指導した。

〈2か月後〉2回目の検査を実施。口腔乾燥、舌口唇運動機能ともに改善を認め、該当項目はなくなり口腔衛生管理へ移行した。

〈14か月後〉最近また口の中が乾くとの訴えがあり、約1年ぶりに口腔機能精密検査を実施した。検査の結果、口腔衛生状態、嚥下機能、口腔乾燥の3項目が該当し、口腔機能低下症と診断した。嚥下機能障害の可能性を疑い、全身疾患の確認及び追加でRSSTを実施し問題のない事を確認。口腔機能管理として以下の個別の指導に加え、総合的な訓練として1日1回自宅からカラオケをするよう指導。

- 口腔衛生状態不良: 舌ブラシによる清掃
 - 口腔乾燥: 唾液腺マッサージの指導、口腔湿潤剤の使用
 - 嚥下機能低下: 藤島式嚥下体操
- 4回目の検査を1か月後に行う予定である。



◀ 検査説明ツールを活用し、検査の説明を実施。



▶ 総合的な訓練として自宅からカラオケをするよう指導を実施。

※2022年5月現在の情報です。

